

第6章 出会い

蜂屋さん

松田山はミカンの花盛りです。白い花は、昔なつかしい甘い香りです。そうです。

「ミカン蜂蜜」の甘酸っぱい香りです。

昔、春になると私の家に蜂屋さん一家が来た。春は、梅の花・レンゲの花・ミカン
の花が咲きます。私の家の庭に蜂の巣箱が沢山並べられました。今思えば、その何ヶ月間か、蜂屋さん一家は、どこに住んでいたのでしょうか。

春が終わると、絞った蜂蜜を一升瓶に詰めて、お礼において行きました。蜂蜜は、
ドロッと黄金色に輝き不気味でした。しばらくすると固まり、一升瓶から出すのが一
苦勞でした。外に放置して太陽に当てたり、お風呂に代わる代わる抱いて入ったり。
白く固まるのは、本物の蜂蜜百パーセントだったからだということを知ったのは、つ
い最近の事です。

蜂屋さんは、毎年来ていたのに、ある年から来なくなりました。一家は元気では
うか。裏の梅林は切り倒され、三階建てのアパートが四棟建ちました。レンゲの田圃
やミカン畑にも新築住宅が立ち並びました。蜂屋さんが来なくなって、もう五十年以
上経ちます。テレビで蜂蜜についての放送があると思い出すのです。

坂本龍一さん

「音楽は、いつも目を閉じて聴くので車の運転はしません」

「小学生の時、親戚の人が『りゅうちゃん作曲やってんだってね、歌ってよ』と言っ
た。音楽＝歌と思っている人は意外に多い」

「おもしろい音楽を作ったり楽しんだりして下さい」。

これはNHKテレビ『スコラ・坂本龍一音楽の学校』第一弾での発言です。こうして話を聞くと、遠いと思っていた人が、身近に感じられます。

一般の学校の先生方も、自分の事、家庭の事を話して、教育に当たれば、また違った教育になるように思いますが、時として、立派な話をするその教師の家庭が、ひどく荒れていて手本にならない場合がある。逆に、立派すぎて「自慢ばかりだ」と誤解を受けるだけの場合もある。「先生のお子さんは、ウチの子供たちが束になってもかなわない」と言う人もある。教師たちが本音を出して取り組むと、大混乱になる可能性がありそうです。親が思っている以上に教師の立場は難しい。

私は坂本龍一監修のCD『にほんのうた』の二集、三集、四集の解説を書きました。四集のステッカーは、坂本龍一と池田小百合です。坂本龍一と仕事をするのは一生に一度の事です。私は坂本龍一の活躍に期待する一人です。

このシリーズも vol.4 を迎え、春夏秋冬、

日本の四季の歌がそろいました。

今回もさまざまなアーティストが、

趣向をこらしたアレンジで、

懐かしい日本の歌を甦らせました。

この失いたくない貴重な伝統が、

たくさんの人に届くことをいのっています。

坂本龍一

歌いつがれて、歌は生きる。

記憶の源泉から、蘇ってくる歌がある。

きびしい冬にも、あたたかい歌がある。

歌いつがれる、歌がある。

池田小百合

三谷幸喜さん

平成二十二年(2010年)十二月二十六日、三谷幸喜脚本NHK総合テレビ「新三銃士」の終幕の放送を見た。

「アトス、アラミス、ポルトス 我ら三銃士!」。「いいぞ!」とテレビに声をかけた。主人公のダルタニヤンが王様の護衛隊の隊長に就任した。三銃士の会話がおかしかった。

「ダルタニヤンを隊長って呼ぶか?」「俺はやだね。今まで通りダルって呼ぶさ」「それは、まずいだろう。なにしろ俺たちの隊長だからな」「じゃあ、タニヤンかあ」。ここで、私は手をたたいて笑いこぼれた。

三谷幸喜は、しばしば、このようなセリフを入れる。「ダルタニヤン」を「ダル」と「タニヤン」に分けた脚本家・三谷幸喜は天才だ。この終幕場面を想定して最初から主人公ダルタニヤンの愛唱を「ダル」としていたなんて、すごい。

「ひとりは、みんなのために みんなは、ひとりのために!」。

エッセンバッハさん

今でも印象に残っている音楽会があります。それは、平塚の市民会館でのエッセンバッハとユースタス・フランツのデュオです。

アンコールで得意のシューベルトの『軍隊行進曲』を弾いた時の事です。スタートしてすぐ、一人は繰り返し、一人は繰り返しをせず弾いたのです。二人は顔を見合わせ、弾き続けましたが有名な曲です。みんなが間違っただけに気がつき、「あっ!」と思いました。間違っただけはエッシェンバッハの方です。ありえないミスです。弾き終わって立ち上がった二人に、客が叫びました。「もう一回弾け!」「もっと弾け!」「ヒューヒュー!」相談してすぐに別の曲を弾きました。それは今日のプログラムの中の曲だったので、客が怒りました。「もっと弾け!」「違うのを弾け!」みんな立ち上がって興奮しています。足を鳴らしている人もいます。今日のプログラムが再びほとんど弾かれ、幕となりました。二人の演奏家は、苦笑いでした。私たちに手を振り、胸に手を当てて深々とお辞儀をしました。花束がありませんでした。

私は、小田急線の最終電車で家に帰りました。小田原駅の駅員が「最終が発車します。お急ぎください」と言う声が、今でも耳に残っています。音楽会に行って、こんなに遅く帰宅したのは初めてでした。

エッシェンバッハの来日公演は、これが最後で、彼は指揮者に転身し、話題を呼びました。私は、ピアニストの若きエッシェンバッハが大好きでした。憧れでした。今でも名前を口にするだけでドキドキします。

フランツは、その後何度も日本に来ました。神奈川県民ホールに来た時、聴きに行きましたが、印象に残る演奏ではありませんでした。金髪のハンサムな青年でした。

ある画家

一ヶ月ぶりの明るい太陽の光です。布団を干して散歩に出ました。酒匂川の河川敷の広場から、松田山の桜祭り行きのシャトルバスが発車しました。観光客がたくさん

乗っています。お土産に、みかんを売っています。みかんの種類は「青島」と「大津」です。

酒匂川の土手のサイクリングコース。頭上を銀色の飛行機が、一筋の飛行機雲を残しながら富士の峰を目指して飛んで行きます。それを眺めている男の人に出会いました。

「あの飛行機は、国内線で、九州や大阪の方に行く。いつも乗るよ」「何をしている人ですか？」僕は画家です。東京に住んでいますが、松田町にアトリエを持っています。松田が気に入っています。大井町の第一生命のどんぐり林の木漏れ陽の中からの風景もいいです。今は、上大井を描いています」「松田城跡には何もありませんが、冬は耀くブルーの空があり、きれいですよ。行ってみられるといいですよ」「春先の曇った空も、きれいなものです」。

「曇った空も、きれい」という発想に驚きました。プロの画家だなと思いました。

「個展は開かないのですか？」若い頃はよくやりました。描いた絵は画商に売ります」

「挿絵は描かないのですか？」挿絵は描くチャンスが何度かあったのですが、筆のタッチが変わってしまうからやめました。あの時、やっておけばよかったと思っています。チャンスはやるべきです。文章も書きます。ペンネームを持っています」。

「私が生まれた時、隣に住んでいた絵描きさんがユリの花を一本描いて、自分で作った額縁に入れてプレゼントしてくれました。描いた人を捜しています。昭和二十六年の事ですから、もうその人は亡くなっていると思いますね。今でも玄関に飾ってあります。私の童謡の本『童謡・唱歌 風だより』(春陽堂)の内田正泰氏の貼り絵の挿絵と、娘が描いた表紙絵と挿絵の『童謡で遊ぼう』(夢工房)を見ていただきたいです。贈ります」「それは楽しみですね」。

住所を交換して別れました。もっと絵の話をしたいと思いました。対岸の土手の工事現場を指さして、「工事前に描いておいてよかった。きちんと整備されてしまったら絵にならない。これだと思ったら、すぐ描いちゃうんですよ」と、しきりに残念がっておられました。

「ムンクが好きです」などと言わなくてよかったと思いながら帰宅しました。以前、夫に「ムンクが好きなんて、若いね、少女だ」と言われたことがあったから。ムンクの展覧会は、三回見に行った事があります。ムンクの赤い線、黒の固まり、死臭を放つ絵。みんな好きです。出会ったこの画家は、どのような絵を描くのでしょうか。

まるで、昭和十九年(1944 年)から山北町に疎開して戦後も過ごした画家の落谷虹児のようだと思います。あの有名な美人画家が山北に住んでいた事は、ほとんど知られていません。童謡『花嫁人形』♪きんらんどんすの 帯しめながら 花嫁御寮は なぜ泣くのだろ♪」の作詩者です。

虹児は、趣味の鮎釣りが縁で知り合った、郵便局長・鈴木隆造(後の山北町町長)の世話で、一家は山北町堂山の種徳寺に間借り。やがて寺の下に三保村から小さな家を移築しました。家の前には御殿場線が走っていました。路線に面した家の白い壁に「虹児」のサインを大きく記し、屋根はおとぎの家のように赤くしました。東京からやって来る編集者たちへの目印です。

戦後もここに留まり畑を作ったりして食糧難をやり過ごしました。昭和二十九年(1954 年)に小田急線玉川学園前駅に近い丘陵に家を新築し引っ越すまで、町に溶け込んで暮らしました。

虹児は、神奈川県立山北高校の校歌を作詞(小松耕輔・作曲)し、校章のデザインも

考案しました。また、山北中学校と、県立吉田島農林高校(現・吉田島総合高校)の校章、さらに山北音頭の作詞(米山正夫・作曲)も手がけました。

伝説の人

私は小さい頃よく近所の年寄りから「医者みっちゃんの孫け」という言葉をかけてもらった。娘たちも同じ事を言われたようで、小学校から帰宅すると、「医者みっちゃんって、だれ？」と聞いて来た。

「医者みっちゃん」は、村の人々に尊敬された村医者であった。だから「医者」、そして「みっちゃん」は、彼の名前「道壽」の愛称。いかに村人に愛されたかは、私の娘の代になっても名前が言われる事でもわかります。

彼は、昔の医者だから漢方医で、病気は何でも診た。どこで医学を学んだか定かでない。酒が三度の飯より好きだった。有名な話が残っている。往診は馬に乗って山北の方まで行っていた。ある時、診察の後、いつものように酒を御馳走になった。朝方、馬が酔いつぶれた彼を乗せて家に帰って来た、というものです。

馬を飼っていて、乗り回していた事は、後日、温室を二棟と母の妹の家を更地にした時、みんなが納得した。敷地は、馬が走り回れる広さがあった。広々と寒々としていた。

「医者みっちゃん」は、大正十一年(1922年)七十七歳で亡くなった。三人の男の子がいたが、一人は生後すぐ死亡、長男は静岡県で家をかまえ、次男が家を継いだが小学校の教師になったため、医者は一代で廃業となった。酒で身上をつぶした。

小学校の教師になった次男の秀斎は、「しゅうさいさん」と呼ばれ、村の人々から尊敬されたが、やはり酒飲みだった。昭和十五年(1940年)、五十四歳で早逝した。

「しゅうさいさん」には女の子が三人いた。私の母が長女。隣の敷地に住んでいたのが次女、そして三女満枝は昭和十二年(1937年)十七歳で肺病で亡くなった。食うや食わずで、医者に診てもらう金がなかったので、亡くなった。父親が早逝したので家は赤貧洗うが如く的生活だった。だれも助ける人はいなかった。親戚に助けられた話も聞かない。どのように生活していたのだろう。だまされた話ばかりが山と残っている。私の母が事のほか酒飲みを嫌うのは、そのためです。

その後、母が小学校の教師になり、同僚の教師である父と結婚し、私が生まれた。私は二人の収入で育てられたので、金銭で苦労することはなかった。金のある幸せは、ねたまれるものです。昔から「たかる」という言葉があるほどです。生きるためになりふりかまわず、みんなが父と母に、たかって来た。私の父と母も、他人や親戚にだまされ続けた。やっと苦労して手にした幸せなのに、どん底にいる人々は容赦がなかった。

だまされたと気がついた頃には、母は過去の赤貧洗うが如くの自分の生活を忘れていた。後日、私が助けを求めてこの話をしても、「金に困っていないのだから」と、だれも父と母に同情する人はいなかった。町の介護福祉課の人に関わりを拒んだ。

「医者みっちゃん」は医者であった時、「しゅうさいさん」や父や母は小学校の教師であった時が、「先生」と言われ一番好い時だった。それは伝説の人でなくても、だれでも、活躍している時が一番好い時に決まっている。

おわかりのように「医者みっちゃん」の孫は、母と、母の二人の妹たちです。私の娘二人が少し大きくなった頃、二階に二間の子供部屋を増築した。町の税務課の人が確認に来た。そして「もう、医療器具はないの。メスとか診察ベットとか」と聞いた。

「医者みっちゃん」伝説は、まだ続いていた。

山田太郎さん

ある日、「山田太郎ショー」の入場券をもらったので行きました。新しくできた松田町の体育館の床に満員の人々が座って、今か今かと開演を待っていました。

ステージには、ドラムとギターとキーボード(ピアノだったかもしれない)が並んでいた。ただそれだけの小編成のバンドだった。

延々と、商工会議所の人や偉い人の挨拶などがあった後で、いよいよショーがはじまった。「待ってました」。一曲目は今ヒットしている『新聞少年』の歌。みんな大喜びで大きな拍手が沸き起こりました。そして二、三曲歌うと、持ち歌が無くなった。

山田太郎が挨拶をしました。「松田のみなさん、こんにちは」と言った。「まつだ」のアクセントが違ったので異様に感じたのは、私だけではなかったようで、みんながシーンとなった。その一言で盛り上がった雰囲気が台無しになってしまった。

第二部は、海軍の白い軍服で軍歌を何曲か歌った。そして「山田太郎ショー」は終わってしまった。客は、「前の人が正座をしていたから、全然見えなかった」「もう一回ぐらい新聞少年を歌ったらよかったのにねえ」とか、「お土産はないの」と不満を言いつつ会場を後にした。

私は、はじめてドラマーがドラムを叩くのを観たので興奮した。今思えば演奏はヨロヨロしてお粗末だったが、この小編成のバンドに感動した。今でもその時の感動を覚えているのだから、相当な物だったのだ。

山田太郎の『新聞少年』は昭和四十年(1965年)のヒット曲なので、山田太郎との出会いは、私が中学生の頃の事でしょうか。山田太郎の細い高い声、白い軍服、バンドの演奏を、昨日の事のようにはっきりと覚えています。その後、松田町の体育館が、あの時のように満員になった事はない。

こりない男

延命寺の裏山は、ホタルの提灯が満開です。ホタルブクロ、別名チョウチンバナともいいます。観光客が折ったり、掘ったりした形跡があります。この花は、山にひっそりと咲くからいいのです。ホタルが入って寝るといのは、なんともかわいいです。

松田町の『こどもの館』の入口に車を止めている男の人がありました。「今日は休館日ですよ」と私が言うと、「ここに車を止めて上まで歩いて、一周してもどって来るのです」。男の人は右半身不随のようです。右手を抱え、右足を少し引き摺っています。

「どうされたんですか?」「脳溢血です。歩いて訓練しているのです。平成十一年の五月に救急車で足柄上病院に運ばれて、七沢のリハビリ施設に二年ほどいました」「お若そうですね。車の運転ができるんですか。うちのおじいちゃんは九十歳(平成十七年)の時、脳梗塞をやって右半身不随です。普通はみんな車椅子ですよ。あなたも歩けて良かったですね。それに、言葉がしっかりしていていいですね。よくわかりますよ。おじいちゃんは言葉が出ないです」「若くないですよ。五十六歳です。七沢の施設には二十歳ぐらいの人もいました。この病気は、いつ起きるかわからないですね」。男の人は二十歳ぐらいの人も脳溢血になっていた事を強調し、気の毒がっていました。

「左手では食べるのも着替えも大変ですね。おじいちゃんは、スプーンとフォークで食べています。脱ぐのはできても、着るのが全くできません」「僕は、箸で食べられますし着替えもできます。あれから六年経って、ほとんどの事は自分でできるようになりました」「それはいいですね。おじいちゃんは、ずっと元気で犬の散歩や自転車で買物をしていたので、入院した時、何が起きたのかわからなくて病院で泣いていました」

「僕は泣く事はないですが、昼間がいけない。同じ世代の人を見ると、なぜ僕だけこんななんだと思うと落ち込んで、夜眠れなくなったりします。おじいさんは、お酒を

飲みますか？」「はい。お酒は、ちびちびしょっちゅう飲んでいましたし、タバコもやっていた。今は、もうしません」「タバコはいけない。酒はこの病気とは関係がないみたいですよ。酒は飲んでもいいんですよ」

私は、酒が良いわけがないと思っているので、この男の人も、こりて無いなあと思った。短時間の話の中に、「僕の奥さん」という言葉が二回も出て来たので、仲の良い夫婦なのだろうと思った。「暑いですから帽子を被った方がいいですよ」「ええ、そうします」「どうぞ、お元気で。さようなら」。六年前に脳溢血ということは、五十歳の時ということになります。これから長い闘病生活になります。

木原美知子さん

テレビでモーニングショーを見ていた。相続の話題だった。姉は母親の介護を、「遠くに住んでいるから」と言って、ほとんどしなかった。一方、妹は自分の生活を犠牲にして、風呂に入れたり、オシメの世話や食事の世話を、かいがいしくしたという設定。

「さて、母親が亡くなり、財産相続だが、今は、姉妹は平等にもらう権利があるという法律があります。あなたが姉だったらどうしますか？」と、司会のアナウンサーがゲストに問いかけた。すると、ゲストの木原美知さんは、「もらえるものは、もらっておいたほうがいいですよ。ハハハ」と言った。私は耳を疑った。「姉は介護をしなかったのだから辞退するか、少しだけもらうことにしたらどうでしょうか。法律のことはよく知りませんが、それが普通の感情でしょう」と言うと思っていたからです。木原さんは、きっと介護をした事がなかったのでしょう。妹の苦勞がわかっていません。このコメントはゲストとしてふさわしくありません。見ているのは全国の主婦で

す。もっと慎重に言葉を選んでコメントすべきでした。実際に法律には感情はなく、親の介護をしても、しなくても兄弟、姉妹は平等に遺産を分けるという決まりになっています。昔は、長男・長女が親の世話をし、全財産を受け継ぎました。そのため土地や屋敷は、そのまま引き継がれましたが、今は法律が改正され、親の面倒は誰がしてもよく、また誰もしなくていいように、介護保険で守られ、介護のプロが家庭を訪問したり老人施設で世話をしてくれます。これが新たな国の方針です。兄弟、姉妹が平等に遺産を相続するので、土地や屋敷が徐々に小さく細かく分けられていき、大地主や大きな屋敷はなくなりつつあります。

教育の現場も変わりました。「親に感謝し、親を大切にしましょう」などと口にしたら「ださい」と言われてしまいます。親や先生が、実践していないからにほかなりません。教育は、その国の国民性を作り、時代を動かすので大切です。

ところで、仰天発言をした木原さんは、その後すぐに亡くなりました。昭和三十九年(1964年)の東京オリンピック女子水泳の期待の星でしたから、体格も日本人離れしていて健康そのものでした。一人っ子で独身。遺産相続は、どうなったのでしょうか。

(註)昭和三十九年(1964年)、東京オリンピック競泳女子四百メートルメドレーリレーで日本は四位入賞した。日本のメンバーは、田中聡子(背泳ぎ・八幡製鉄)、山本恵子(平泳ぎ・八幡製鉄)、高橋栄子(バタフライ・別府大学)、木原美知子(自由形・山陽学園山陽女子高等学校)。金メダルはアメリカ、銀メダルはオランダ、銅メダルはソビエトだった。木原美知子さんは、百メートル・二百メートル背泳ぎ、四百メートルメドレーリレーに出場。当時、高校生の木原さんは「ミミ」の愛称で一躍アイドル選手となった。昭和四十二年(1967年)のメキシコプレオリンピック百メートル自由形金メダル、

二百メートル自由形銀メダルを獲得した。平成十九年(2007年)十月十三日、神奈川県平塚市内のプールで親子水泳教室の指導中に倒れ、意識不明のまま平塚市民病院に搬送された。一時は意識を回復したものの、同十八日、クモ膜下出血のため亡くなった。

藤原紀香さん

タレントの藤原紀香さんが、テレビで料理をした。『環境サミット』の番組で、朝のヘルシーな食事の紹介。

「朝は、いつも納豆を食べるんですよ。薬味として、ネバネバした物を入れます」と言って、料理用のボールに納豆、続いてネギ、オクラ、ショウガ、タマゴ、根昆布、キムチ、ゴマを次々に入れた。そして、かき混ぜて、その料理は終わった。ボールは納豆に混ぜられた物であふれかえった。私は「一人住まいなのに、ずいぶんたくさん食べる人だなあ」と驚いた。

翌日、マーケットに行くと、納豆売場は、いつもとようすが違い、うず高く納豆が積み上げられていた。私は「昨日のテレビ放送の影響を見越して、店頭に並べたんだな。藤原紀香の影響って、すごいな」と思った。何日かして、またマーケットに行くと、その山と積まれた納豆は売れ残り、半額になっていた。しかし、半額の納豆は、だれも買っていなかった。「半額の納豆は食べられなくても、まずい」ことを主婦なら誰でも知っている。

長谷川きよしさん

小田原に「労音」があった頃、長谷川きよしのコンサートが小田原市民会館であった。大ホールは、ほとんどが女性で満席だった。

曲の合間のトークで、「小田原市民会館がわからなかったので、タクシーに乗ったら、運転手さんに『すぐですよ』と言われた。そしたら本当にすぐだった。乗ったら、すぐ降りた」と言い、会場の客の笑いを取ったのを覚えている。小田原市民会館は、駅の東口のタクシー乗り場からだと一直線で、五分もかからない。

彼の最大のヒットソング『別れのサンバ』（作詞・作曲：長谷川きよし）の途中で、爪が割れて血が出た。テープを巻いて続け、コンサートは無事に終了した。

長谷川きよしを次に見たのは、最近で、NHK総合テレビ『スタジオパークからこんにちは』だった。歌から離れて北海道でマッサージ師をしていたそうです。番組の中で、『別れのサンバ』を歌った。「いいなあ」と思った。この歌は、この人にしか歌うことができない。私は『別れのサンバ』が大好き。小田原市民会館のコンサートが昨日の事のように思い出された。

ところで、小田原には知る人ぞ知る『小田原おでんの歌』というのがある。NHKのお昼の番組でも紹介されたことがあるマイナーな曲です。暗く淋しい『別れのサンバ』に類似していると思うのは私だけだろうか。

梅沢富美男さん

娘と一緒に観に行こうと誘ってくれたので秦野文化センターまで出かけた。『梅沢武生劇団・秦野公演』である。大ホールは中年以上の女の人で埋め尽くされていた。

一部は時代人情劇で、後ろに座った人が、「あれが、座長の弟よ」「あの若い方は、従兄弟よ」と、隣の人に話しているのが聞こえた。やけに詳しいのは、追っかけをしている熱狂的なファンに違いない。劇のバックに描かれた絵が、派手で大柄で度肝を抜いた。風呂屋のペンキ絵のようだった。

休憩の時、梅沢富美男が出て来て、「これから、売店の宣伝をします。こんなグッズが売っていますから、帰りには必ずお買い求めください。サイン入りのTシャツでしょう。ハンカチでしょう。団扇とか。別にあっても、なくてもいいような物ばかりですが、お土産に買ってやって下さい。それから、もう三月だから時期外れになってしまいましたが、カレンダーもあります。便所にでも飾って眺めて下さい。生活が懸かっているのです、よろしくお願いしますね。」会場は爆笑。お客さんは大喜びだ。ずいぶん下品だなあと思いつつも、私も手をたたいて笑った。

二部は歌謡ショーだった。白いスーツにサングラスをかけた梅沢富美男オンステージだ。「テレビでは、歌手の前川清と一緒にやってんだけど、清はギャラが高いから、今日は僕一人でやります」と言って『伊勢佐木町ブルース』を歌った。「♪あなた知ってる 港ヨコハマ 街の並木に 潮風吹けば♪」ため息の所は、お客にマイクを向けた。一番前の席にいた娘にマイクが向けられたが、娘は黙っていた。梅沢富美男が、こけたので、また爆笑になった。歌い方は地声で素人だった。

ラストは、みんなのお待ちかね梅沢富美男の女形の踊り。その白塗り女の美しさに息をのんだ。テレビの番組で、「楽屋で大股開いてタバコ吸ってても、女形やっちゃう。仕事と思えばなんでもないよ。好きとか嫌いとか、そういう事じゃないね」と言っていたのを思い出した。芸人のど根性だ。一曲だけ踊ると幕となった。私たち客は、全員ものたりないまま帰宅した。しかし、もう一度観に行こうとは思っていない。

タバコ男

散歩をしていると、男の人に呼び止められました。「僕は、歩こう会の世話人をしています。会に入りませんか」「それって知っています。町中にチラシが貼ってあります

ね」「女性が七割、五十代から八十代までです。僕は六十七だけど、若い方です」「女性の時代ですね。男はダメですね」「男は、日曜日は家でゴロゴロしたいのでしょう」「一日がかりでしょう。何処へ行くのですか」「弁当を持って、金時山や三ツ峠、丹沢湖とか鎌倉なんかに行きます」「それは、いいですね。私は、父と母が九十歳(現・平成十七年)だから、三度の食事を作らないといけない」「そうなんですか。それは知りませんでした。九十じゃ大往生だ。僕も、若い頃から病気一つしたことがない」「歩いているからじゃないですか」「それもある。タバコを吸っていても元気ですよ」「タバコは、よくないですよ。それじゃ歩いているかいがない」「僕からタバコを取ったら何にも残らない。人間ドッグの検査でも〇〇異常なし、異常なし、異常なしばかりだから、タバコはやめないで吸い続けている。癌になった人は、『タバコをやめていればよかった』と言う。でも、交通事故で死んだ人に対しては、『こんなに早く死んでしまうなら、好きなタバコを、もっと吸わせてやっていたらよかった』と言うでしょう。物は考えようだね。僕はそう思って吸っているんだ」「でも、タバコは、よくないですよ」「あなたの肺の中は、タバコのヤニで真っ黒ですよ」と言いそうになりました。

「あなたの奥さんは歩かないんですか」「太っちゃっていて、歩くのは嫌いだ。歩こう会は、早足で歩くでしょう。出たがらない」「太っているからこそ歩くのではないですか」「そうなんだけどね。ヤダって言うんだ」

「お子さんは?」「息子が二人で、娘が一人。僕が退職の時、『記念に何か買ってやる』と言って、秋葉原に行ってこの小型ラジオを買ってくれた。こんな物安いんだけど、その気持ちがうれしい」「それは良かったですね。幸せですね」「長男の嫁は、自分の娘のように思って付き合っているんだ。知人の病気見舞いに病院に行ったら、嫁さん

が車椅子の親に対して『自分でトイレに行って来い』と怒鳴りつけていた。あの人は、きっと若い貞嫁さんにきつく当たっていたんだねえ」「車椅子では、一人でトイレは無理ですよ。」

「トイレと言えば、僕はTOTOというトイレの会社に勤めていたんです。もう退職しましたがね。同窓会などで何をしているか近況を話すでしょう?僕が『TOTOに勤めている』と言うと、『なあんだ便器の会社か』と言われたものです。でも、僕は堂々としていました。たかが便器だって、だれでも毎日必ず世話になるものでしょう。TOTOが大きな会社に発展すると、今度は、『いい会社に勤めていて羨ましい』なんて言われたりしました。人は心の中では何を考えているかわからないですよ。いい顔して、いい事を言っていたってね。」その男の人は、本当に悔しそうに話しました。私が、見ず知らずの他人だから平気で話したのです。

「また、会いましょう。お元気で」と別れました。一期一会です。きっと、もう会う事はありません。

蓑田良子さん

私が勤務していた鎌倉の私立の中学と高校には大学があり、クラブ活動で合唱団が結成されていた。指導者の蓑田先生は厳しく、放課後は勿論、お昼の短い休み時間にも二、三人ずつ呼び出されて、ハモる練習をさせられていました。徹底的に音程、発声、発音の指導をしていました。教授の人生の全てをかけた合唱団への情熱は生徒にも伝わり、毎年各種のコンクールで賞を総なめにし、大学の名前は全国に知れ渡っていました。

私は練習の伴奏や発声指導を手伝いました。童謡や唱歌を合唱曲へ編曲する仕事に

も協力しました。東京音楽書院発行のフラワーコーラスの合唱曲集シリーズには、私が編曲したのも旧姓で掲載されています。現在、東京音楽書院は倒産し、フラワーコーラスは絶版。

ある日、コンサートで、もめた事がありました。太鼓のチームの次に、大学の合唱団が出演することになったのです。教授は、「太鼓の次でしたら、うちの合唱団には歌わせません」と、キッパリと言いました。

合唱団が歌う事になっていたのは、無伴奏の女声三部の宗教曲でした。太鼓の後では、観客の耳が対応できないからです。太鼓の音量は半端ではありません。太鼓の方にも言い分がありました。太鼓を並べる時間が必要で、音の調節もあるのです。

しかし、教授は、意見を押し切り、太鼓の演奏は、最後になりました。私が指導していた中学と高校の合唱団が先に歌い、次に大学の合唱団が歌いました。そして地域のママさんコーラスが歌い、コンサートは太鼓で締め括られ大成功でした。観客は大喜びでした。

私は合唱にかける信念に脱帽しました。観客の事まで考えていたとは驚きでした。教授は一生を合唱指導に捧げ、亡くなりました。肺の病気の後、歌が歌えなくなり、若い頃は合唱団や歌手の伴奏をしていた話を聞いた事があります。これが勉強になったのだそうです。自分で歌わなくても合唱の指導はできるものです。よいハーモニーかどうかを聞き分ける耳が大切なのです。

鎌倉にある教会でも、ママさんコーラスの指導をされていました。古典の教会音楽、整った合唱曲が好きだったようです。国立音楽大学で、成田為三や岡本敏明や小山章三が広めようとした「楽しい音楽、遊びの音楽」に対しては、「ふざけている」と批判的でした。「背筋を伸ばして歌う、無駄口は慎み、まじめな態度で臨む音楽」の提唱者

でした。「音楽の授業とは、そういうものでしょう」と言っておられました。

さっそうとされていて、白のスーツが似合い、ステキで憧れました。私は声をかけていただき、よく鎌倉の家で歌の個人レッスンをさせていただきました。一緒に食事をした事など、懐かしく思い出します。ちまたでは、布施明が歌う『シクラメンのかほり』が大流行し、東海大附属高校野球部の原辰徳選手が甲子園を沸かせた頃の事です。

井上ひさしさん

「むずかしいことをやさしく やさしいことをふかく ふかいことをおもしろく」というモットーで書き続けた井上ひさしさんが、平成二十二年(2010 年)四月九日に亡くなりました。

童謡の会では、毎年、杉谷代水作詞 / コンヴァース作曲『星の界(What a friend we have in Jesus)』「♪月なきみ空に きらめく光」を歌った後、必ず井上ひさしさんの作った歌詞で歌います。メロディーは、『讃美歌 312 番』「♪いつくしみ深き 友なるイエスは」と同じです。私は、この『星あかり』をととても気に入っています。みなさんも歌ってください。

星あかり

作詞 井上ひさし

一、空の^{かなた}彼方より ^{きら}燦めく光

^{あまじ}天路を駆け来て ^{いま}今光るらむ

この星あかりを 導きとして

^{あした}明日も我らは 正しく生きん

二、^{あま}天の河原より とどきし光
^{としつき}年月かさねて 今光るらむ
この星あかりを 頼^{つえ}りの杖に
明日も我らは 氣強く生きん

小沢征爾さん

指揮者の小沢征爾さんは、平成二十三年(2011 年)八月五日現在七十五歳。食道ガンの手術の後、腰痛治療のため休養していましたが、七月二十八日、長野県山ノ内町奥志賀高原の「森の音楽堂」で開かれた「森の音楽会」に登場し、弦楽合奏団を指揮した。しかし、具合が思わしくなくヨーロッパで治療中とのことでした。

小沢さんは、戦後（昭和二十二年）神奈川県足柄上郡金田村金手に転居し、金田村立金田小学校の六年生でした。丸刈りの記念写真があります。とても神経質で、か細い感じです。同級生の子供たちのほとんどは農家の子で、たまに父親が国鉄に勤めていたりするのは珍しい事でした。

私の家は金手にあり、御殿場線の踏切の坂の下にあります。金手の子供たちが金田小学校に行くには、この踏切を通らないと行けません。小沢少年も毎日踏切を越えて学校に通ったことでしょう。

祖母(たつ)は、私が小学生でピアノを練習していた頃、「金手にも、ピアノが聞こえて来る家があった」と言っていました。もっと詳しい事を聞いておけばよかったと悔やまれます。家のあった場所を教えてもらいましたが、今は新しい家に建て替えられています。

小沢さんは、その後、同級生や町長が、東京のコンサート会場の楽屋に会いに行っ

て説得しても、大井町から招待があっても、大井町に来ることはありません。演奏会で忙しいからとか、病気の療養とか、それだけの理由ではなさそうです。

瀬戸内寂聴さん

平成二十三年(2011 年)三月十一日の震災の後、瀬戸内寂聴さんが、被災した小学校で講演した。講演の後、「感想とか、みんなの意見を聞かせてくれるかな?」と言った。手を上げた女の子が「今回の地震で、大勢の人が死んでしまったけれど、これは、戦争で大勢の人が死んだのと同じと思う」と発言した。

すると寂聴さんが「あなた、偉いわねえ。よく気が付いたわ。今回は、戦争の事については、難しいから話さなかったの。そうよ、その通りよ。あなた、とってもいいわよ。戦争で亡くなった人の命も、今回亡くなった人の命も、人の命の重さは、変わらないのよ。一人一人の命って、とっても大切なのよ。その考えを大切にね。どうも、ありがとう」と対応した。わかりやすい。さすがだなあと思った。ただのタレント僧侶ではなかった。筋金入りだ。人気の秘密を見た気がした。

日野原重明さん

日野原重明さんは、平成二十三年(2011 年)十月四日、百歳になった。NHKが一年間密着取材し、特集番組を放送した。十月八日(土)NHK総合テレビ「日野原重明 100歳 いのちのメッセージ」。

医者になったのは、十歳の時、病気がちな母親を助けてくれた医者のようになりたいと思ったからだそうです。父親は牧師。なぜ、牧師にならなかったのだろうと思ったのは間違いで、彼は「医者であり牧師」だ。日野原重明は、命の授業をする。今を生きる事の喜びを指導する。みんなを導く。

東日本大震災の地にも足を運んだ。被災したおばあさんたちとの握手。この中にもファンがいた。日野原重明について詳しい人がいた。私の童謡の会にもファンが沢山いる。口々にすばらしいと言う。私も、玉川大学での夏期講習会の講演(平成十二年七月)で出会いファンになった。当時、「駅の階段は一段おきに上る」と話され、みんなが驚いたのを覚えている。玉川学園の創立者の小原國芳がいれば、もっと話が盛り上がっただろうと私は思った。小原國芳はクリスチャンで教育者だった。

日野原重明さんは、聖路加国際病院の医師です。「赤とんぼ」の作曲者の山田耕筰は、昭和四十年(1965年)十二月二十九日、心筋梗塞のため八十歳で亡くなりました。ちょうど「赤とんぼ」の作詞者の三木露風の死去一年後の同じ日でした。十一月初旬、聖路加国際病院に入院していた時の担当の医師は、日野原医師でした。耕筰は「自分の曲は、オペラのように歌うのではなく、もっとさらりと歌うのだ」と言っていたそうです。

テレビ取材中、奥さんは九十二歳の誕生日を迎えた。認知症が進行している。家族や親戚が集まり病室で『讃美歌 312 番』『いつくしみ深き 友なるイエスは』を歌った。奥さんが好きな讃美歌だ。奥さんも歌っているように見えた。最後の日まで仲のいい夫婦です。奥さんもクリスチャンで、みんなの世話をする人だった。日野原さんは、二人で使命を全うすると繰り返し言われた。「スピリット」(精神)という言葉が美しかった。

しかし、何もわからなくなっている奥さんは、テレビ出演を喜んでいただでしょうか。自分の今の姿を全国の人に見てほしかったでしょうか。人は誰でも、弱っている姿は見せたくないものです。その事を、わからない人が多い。

柳沢慎吾さん

ある日、ラジオを聴いているとゲストのタレント・柳沢慎吾にアナウンサーが尋ねた。「忙しい毎日と思いますが、心を休めたりする時は、どこに行きますか?」すると、即答で「海を見に行きますねえ」。アナウンサーが「海と言うと、東京湾とかですか?」と言った。私は、違うよ、小田原の海に決まっていると思った。すると、「いやあ、海と言うと、何ととっても湘南の海ですね。僕の場合は、小田原の海です。海を見てみると、なんというか、そう、癒されますねえ」と言った。私は、「ほら、やっぱりね」と思った。

柳沢慎吾は小田原市出身。私は、松田町にある私立高校生だった彼に、川音川の橋の上で何度も出会っている。いつも大勢の仲間と一緒に、慎吾君だけが大声で何か夢中で話をしていて。帰宅するので、みんなは新松田駅に向かって普通に歩いているのに、慎吾君は後ろ歩きをしていた。つまり、みんなの方を向いて、話をしているので、おのずとそんなスタイルになっていた。この仲間の中に、顔は高校生だが、私より小さな背丈の少年がいたのを覚えている。慎吾君は、いつも陽気だった。仲間は多かったが、親分おやぶんと子分こぶんのようではなく、あくまで楽しい仲間といった感じだった。

その後、慎吾君は、いろいろなテレビドラマやクイズ番組にも出演し、有名タレントに成長した。松田町での成人式のゲストに呼ばれて講演をした事もあった。慎吾君がテレビに出ると、私は母親目線になる。これからも元気で活躍してほしいと願っています。「慎吾君、頑張って」。

江戸屋子猫さん

平成十七年(2005 年)、NHKテレビの『お昼ですよ ふれあいホール』に声帯摸写

の江戸家子猫さんが出演しました。江戸家子猫さん(岡田八郎君)は中学の先輩です。委員会と一緒にやったことがありました。神経質そうに笑う所は、今テレビに出ているその顔と変わりありません。テレビの中の子猫さんは、立派な風格でした。お父さんの猫八さんの得意芸のウグイスの鳴き真似をしました。そして、カエル、蝉、鶴、犬の鳴き真似を次々しました。

「文部省唱歌に『雪』という歌があります。♪ゆーきやこんこ あられやこんこ・・・犬は喜び庭かけまわり 猫はこたつで丸くなる。・・・やだなあ皆さんシーンとなって聞いちゃって。おやじは、『猫はこたつで丸くなってて、あったかくていいけど、犬は外で飼っているから、雪ふったら外で暴れてなきゃア、寒くってやってらんない』なんて言って笑わしてましたっけね」と言いました。

子猫さんの歌は、驚くほどうまかったので、会場がシーンとなったのです。以前、黒柳徹子さんと、芥川也寸志さんが司会をする音楽番組にギター演奏で出演した事がありました。『アルハンブラの思い出』を弾き、みんなを圧倒したことがありました。根っからの芸人です。

最初の頃は、親子で出ていました。猫八さんが言いました。「俺は、もうこいつに負けている。なんしろ若くてハンサムだからね」と。当時より、声帯模写も人を引き付ける話術もずっとうまくなっています。

テレビを観て、おじいちゃんも、おばあちゃんも笑っています。私も、久しぶりに笑いました。まるで暗くなっている私の家の事情を知っていて、励ましてくれているかのようです。がんばろうと思いました。テレビに向かって、「おじいちゃん、おばあちゃんに九十歳のお祝いのプレゼントをありがとう。応援しています」と言いました。一瞬、心が晴々となりました。

子猫さんは、平成二十一年(2009 年)六十歳になったのを期に、四代目・江戸屋猫八を襲名しました。猫八さんの同学年には、俳優になった風間杜夫さん(住田知仁君)もいました。中学の当時から、女の子に人気でした。

芸能界という所は、学歴は関係が無いようで、インターネット上では、二人とも中学の名前は書かれていない。近年、喉頭癌で亡くなったロック歌手が、「才能のない奴が大学に行くんだ。俺は、才能があるから大学には行かない」と言ったそうです。芸能界は実力の世界なのでしょう。